

とては北アフリカでの劣勢を挽回し連合軍のヨーロッパ本土への侵略を阻止するための方法のひとつとして考えられることになります。スペイン本土を素早く横切り、ジブラルタル海峡を渡ってスペイン領モロッコに入ることができるようになると、それは連合軍全体にとってたいへんな脅威となり、連合軍はこのドイツ軍を追い返すことができるまでは反攻作戦はすべて考え直さねばならなくなります」と。

スペイン内戦に勝利したフランコは、その助力をしてくれたヒトラーにたいして考えられない抵抗をした。ヒトラーはフランスを降伏させた後「イサベル・フェリクス作戦」を決定し、20個師団の兵力を持ってスペイン国土を南下し、その最南端ジブラルタルのイギリス要塞を攻撃し、それによってイギリスを地中海および北アフリカから一掃しようとするものであった。それはスペインを第2次大戦に巻き込むものである。そのため1940年10月23日午後2時、アンダイの停車場でヒトラーとフランコは会うことを決めた。フランコは命じて一時間遅れて到着させた。ヒトラーの説得にフランコがいちいち賛成しつつ、それに条件をつけ反論し、結局、会見前と同じように、曖昧で、拘束力のない条約となつた。ヒトラーは「あの男に二度と会うくらいなら歯を、三本か四本抜かれる方がました」と言ったという。⁽⁷⁾ スペインは大戦に巻き込まれるのを防いだ。スペイン内戦において、オーウェルを含めて感動的な詩を書いた者たちは第2次大戦にはほとんど詠わなかった。小野先生は、ディ・ルイスの次の詩を答えとして、その理由をあげた。「…正直な夢によつて生きてきたぼくたちはより大きな悪にたいして悪を守るのだ」。⁽⁸⁾ オーウェルも「作家とレヴァイアサン」(1948年)の中で、「政治において二つの悪のうち、より小さな悪を選ぶだけである」と書いている。しかし、私は繰り返すが、「原爆」出現は「小さな悪」ですまされようか。

奥山先生は旅を好まれた。私は大阪の大会

を利用して、伊吹山と大台ヶ原に登った。奥山先生も私に、「秋田駒ヶ岳から岩手山まで縦走したことがある」と言わされた。オーウェルが『1984年』を書いたスコットランドのジュラ島のバーンヒルまで足を伸ばし、ほぼ往復25kmをこなされた。「実際に見る」ことは感情移入だけでは済まされない感動がある。奥山先生は「見る」だけでなく、オーウェル関係者に多数お会いしている。私もガンジーの足跡を一部だが訪れた。アッテンボロー監督の映画「ガンジー」の中でオーウェルの生まれた「MOTIHARI」の文字が出た場面には感動した。インドでのガンジーの活動の第一歩のところなのだ。蛇足だが、プロンペンの「トゥールスレン博物館」に行ったことがある。ポル・ポト政権下の肅清の舞台の一つである。2万人が収容されて、生還したのは6名。血痕の残る部屋。発見された頭蓋骨でつくられたカンボジアの地図。「シアヌークとポル・ポト」の一緒の写真を見て「政治」を実感した。

冒頭に紹介した『故旧』は芹沢の『人間の運命』を想起させる、と書いた。私はその舞台である沼津の我入道にも行った。財産を全部差し出した教団本部にも行った。私はなんとか熊本の芦北町に行ってみたいと思っていた。奥山先生の葬儀に参列させていただき、「これは奥山先生の最後の作品だ」と深く思った。モーツアルトの「レクイエム」の流れる中の献花。オーウェル会の有馬先生は、奥山先生は「カンブラ」の「レクイエム」もお好きだった、と言われた。オーウェルと同じ、過去への強い愛着、無宗教の宗教性に触れる想いであった。最後に、奥山先生への挽歌で締めくくりたい。

ここまでではもう登れまい白神の
残る雪面に撫の根開き

注

- (1)『オーウェル研究第10号』「偶然と必然の細い糸：オーウェル研究－たどってきた

道」に詳しい経験がある。

- (2)これは後にオーウェル会有志訳『気の向くままに』(彩流社)に結実した。
(3)宮本靖介著『ジョージ・オーウェルの栄光と悲惨』(英宝社)
(4)『オーウェル研究第16号』「オーウェル・18歳の週末」
(5)甲斐・三澤・奥山訳『ジョージ・オーウェル 戦争とラジオ』(晶文社)
(6)小野協一著『スペイン内戦をめぐって イギリスの1930年代文学』(研究社選書)
(7)清水幾太郎著『昨日の旅』(講談社)
(8)小野協一著(前書と同じ)

乱暴な、謎解き『動物農場』

—「オーウェルと私」に代えて—

西川 伸一

わたしのオーウェル歴はきわめて貧弱なものである。学生時代に『一九八四年』を飛ばし読みしたにすぎなかつた。その奥付をみると、1983年6月23日に読み終わったと書いてある。するとあれは大学4年のときだったのか。「この小説は諦念しか提出しない」と生意気な感想が記されている。

それ以来ずっと、わたしはオーウェルと音信不通であった。ところが、最初の「出会い」から奇しくもちょうど四半世紀が経つ2008年6月に、偶然が重なつてわたしはオーウェルと劇的「再会」を果たすことになる。手に取った『動物農場』にわたしはすっかり頭を耕されてしまった。そして、生兵法はけがのもととは知りつつも、『オーウェル『動物農場』の政治学』(ロゴス、2010年)なる拙著まで刊行してしまつた。

ちなみに、わたしは勤務先では政治学科に所属している。先日、政治学科長名で新入生に勧める本を紹介コメント付きで3冊知らせてほしいという依頼のメールが、所属教員に

届いた。わたしは迷わず1冊目にこの『動物農場』を挙げた。「政治の生理と病理がすべて集約されている」などと簡単なコメントも付けた。

それにしても、オーウェルは『動物農場』の着想をどこから得たのだろうか。岩波文庫版[2009]の訳者・川端康雄はその解説の中で、「少年時代にかれはピアトリクス・ポーターの『こぶたのビグリン・ブランドのおはなし』(一九一三年)を愛読していたことが知られている(この絵本では豚が二本足で歩く)」(247頁)と述べている。

また、この岩波文庫版には付録としてオーウェルによる「ウクライナ語版のための序文」が訳出されている。そこではオーウェルは『動物農場』のプロットをひらめいた瞬間を次のように語るのである。

スペインから戻つてしまらくの間、ソヴィエト神話を暴露する物語の形式を考えあぐねていたところ、「ある日(当時小さな村に住んでいた)、十歳ぐらいの小さな男の子が、巨大な輶馬を驅つて狭い小道を進んでいるところに行き合させた。馬が向きをかえようとするたびに鞭を当てている。そのときわたしはふとこう思った——このような動物が自分の力を自覚しさえすれば、わたしたちは彼らを思いどおりに操ることなどとうていできないだろう。(中略) 真の闘争は動物と人間とのあいだにある。これを取つ掛かりにして、物語を練っていくのはむずかしくなかつた。」(216頁)

ところで、前述の拙著を「1984blog」というHPで書評していただいた(<http://1984.asablo.jp/blog/2010/03/26/4974832>)。その管理人の方とお会いしたところ、『動物農場』とよく似た寓話小説が革命直後のロシアで発表されていたとかがつた。歴史家ニコライ・コストマーロフによる『家畜の反乱』がそれである。ソ連末期に『モスクワスキエ・ノーヴォスチ』という新聞に、ヴィタリー・トレチャコフ「ジョージ・オーウェルかニコライ・コストマーロフか?」という記事が掲載され

た（1988年6月26日付）。件の管理人氏がHPでこれを訳されている（<http://www.asahinet.or.jp/~ir4n-khr/orwell/kostomarov.html>）。

それによれば、コストマーロフが『家畜の反乱』を書いたのはおそらく1879年から1880年だった。彼は1885年に死去するが、『家畜の反乱』が世に出たのは1917年の二月革命のことであった。『家畜の反乱』の筋書きはトレチャコフの要約をそのまま引用するところとおりである。

ウクライナのある領地で、家畜の間で革命的な動搖がおきる。この動物農場の長老、種牛が煽動的な演説で登場する。種牛は、肉体的には弱いが狡猾な、人間による権力の、動物に対する不正について語り、革命を呼びかける。革命思想は全員を捉え、最初の機会に、革命が燃え上がる。種牛と種馬に率いられた動物たちが、私有地を襲って勝利する。花壇を破壊した豚が最初の果実を享受する。だが人間による管理が無いために、家畜は自分たちの糧食を確保することもできない。次第に連中は自分の馬屋牛舎に戻る。革命は自ら衰亡する。

しかも、上で引いた種牛の「煽動的な演説」は『動物農場』冒頭におけるメジャー爺さんの大演説と文脈がよく似ている。トレチャコフは、オーウェルがなんらかの方法でこの『家畜の反乱』を知り、これが1930～40年代の諸事件につながるよう加筆したのではないかと推測している。

日本でも、津坂友紀が2008年に「【研究ノート】ニコライ・コストマーロフとジョージ・オーウェル」（『創価大学ロシア・スラヴ論集』第1号）を発表している。津坂は前述のウクライナ語版のための序文でオーウェルが「ことさらに（中略）オリジナリティーを強調している点」に、かえって疑念の目を向ける（49頁）。

とはいっても、オーウェルはロシア語を解したのだろうか。ヒントはスペインにありそうな

気がする。ウクライナ語版のための序文で先に引用した箇所の直前に、オーウェルは「スペインからもどったわたしは、ほとんどだれにでも簡単に理解できて、他国語に簡単に翻訳できるような物語のかたちでソヴィエト神話を暴露することを考えた」（216頁）と述べている。スペインでの従軍経験が『家畜の反乱』と『動物農場』を結びつけたのではないか。

周知のようにオーウェルは1936年末にバルセロナに赴き、1937年はじめに反スターリンを掲げるPOUM（マルクス主義統一労働者党）義勇軍に入隊している。そしてアラゴン戦線での従軍のあと、同年5月には休暇中のバルセロナで、ソ連が支援する共産党とPOUMなどとの間での市街戦に遭遇するのである。その従軍記『カタロニア讃歌』に、オーウェルがロシア人と接触したことを示す記述を探してみた。

市街戦のさなかオーウェルは中立地域とみなされたコンティネンタル・ホテルへ何度か食事に出かけている。それについて、次のようなことが書かれている。

「市街戦が始まると同時に、このホテルには、まことに奇妙な人びとが大ぜい集まつてきて超満員となった。外国のジャーナリスト、各方面の政治犯容疑者、スペイン政府に雇われているアメリカ人のパイロット、G・P・Uの手先といわれ、チャーリー・チャンという渾名で、腰のバンドに回転式連発拳銃と格好のいい小さな手榴弾をくっつけていた、でっぷり太った人相の悪いロシア人を含めた共産党のいろいろな手先たち（後略）」（角川文庫、192頁）

このチャーリー・チャンはその後まもなくして、『カタロニア讃歌』にもう一度登場する。

「例のでぶっちょのロシア人のスパイは、外国人の避難客と見ると、片っぽしからつかまえて、この事件は全面的に無政府主義者の陰謀なのだ、とまことしやかに説明していた。私は、多少興味をもってこの男を観察していた。というのは、うそをつくのを商売にしている人物（中略）を見たのは、それが初めて

だったからだ。」（200頁）

でぶっちょのロシア人はともかく、オーウェルがスペインでロシア人と接触する機会があったことは確かなるようである。そしてなんらかのヒントをつかんだのではないのか。

やはり生兵法はけがのもと。乱暴な謎解きはここまでにしておこう。

オーウェルと私

前津 朋子

オーウェルに出逢ったのは20歳頃のことだった。大学3年生になって選択したイギリス政治学のゼミで、階級社会が取り上げられていた中で、「クラス・レス」という状態に陥った作家がいたと知り、それをオーウェルだと思い込み、何となく、卒論のテーマとして扱ってみようと思ったのがきっかけであった。よく調べてみると件の作家はD.H.ロレンスであったことが解って困ったが、作家を変えるということを考えず、オーウェルをテーマにすることにし、著書を読んだり研究書を紐解いてみたり、ということを始めた。

そんな消極的な流れで付き合い始めた訳だが、卒論だけでなく、もっと研究したいと大学院にまで進み、そのお陰で日本オーウェル協会という学会への入会も許可して頂いた。不思議なご縁であった。

現在の私は、すっかりアカデミックな世界からは離れてしまつておらず、オーウェルの小説やエッセイの内容もすいぶん忘れてしまつていて、恥ずかしい限りであるが、ことあるごとに思い出すのが、「If liberty means anything at all it means the right to tell people what they do not want to hear.」という、『動物農場』への序文にある有名な一文である。

古来、人々は自由を求めて戦い、多くの命が失われた。日本は敗戦により、期せずして自由を享受するようになったが、近隣諸国、今もってひどさを増す圧政や弾圧的行為を見

るにつけ、自由のある国に生まれて良かったと思わざにはいられない。

それを踏まえた上で、オーウェルの言う、自由の「影」の部分、自由の「残酷さ」に想いを馳せるのである。日本国憲法によって、国民はあらゆる種類の自由が保障されている。卑猥な広告や表現を公に掲げるのも、どぎつい色の住宅を作るのも、小さな村に突然大型ショッピングセンターを建てるのも、自由なのだ—たとえそれが誰かが不愉快に思ったり、景観を乱したり、昔からのコミュニティを破壊するようなものであっても。

先の12月に成立した、東京都青少年健全育成条例改正は、自由を規制するタイプの改正である。これに対し、出版業界は激しく抗議した。多くの一般の目も、役人の暴挙だと、東京都に非難の目を向けているようである。今回の改正に、どちらかというと賛成の私は、肩身が狭い思いだが、アニメや漫画をこよなく愛する人間として、あえて反対の人々に問いたい。「表現の自由」を享受する中で、出版業界は本当にモラルを守ってきたか。利益追求のあまり、表現がエスカレートしていかなかったと心から言えるか。

個人は、「好き勝手」と「自由」は同じだと考えている。だから、怖いのだ。

慎重に、自由の「影」の部分を認識しながら、「光」の部分に感謝して、行動しなければならないのだ。

オーウェルの言葉は、—ひょっとしたら元の文脈、意図からはずれてこちらが受け取ってしまっているかもしれないが—クールな知性を忘れないための、足がかりをいつも自分に提供してくれているように感じられてならない。事故的な出逢いではあったが、今後もオーウェルと一緒に歩いていきたい。たまには、喧嘩することもあるかもしれないけれども。